

カトリック社会論と自由市場経済

——ペルソナの理念と聖書のたとえ話——

中 矢 俊 博

目次

- 一 はじめに——自律性の大切さ——
- 二 カトリック社会論とは何か
 - (1) ペルソナとしての人間観
 - (2) 連帯の理念
 - (3) 補完性の原理
 - (4) 共同善の理念
 - (5) 労働のもつ価値
- 三 自由市場経済論
 - (1) 期待される経済的機能
 - (2) 期待される経済社会的機能
 - (3) 期待される社会倫理的機能
- 四 ペルソナの理念
 - (1) ペルソナ（人格）と人間
 - (2) ペルソナ（人格）と共同体
 - (3) ペルソナ（人格）と尊厳・信仰・責任
 - (4) ペルソナ（人格）と人権
- 五 聖書の中の「タラントンのたとえ」話
- 六 おわりに——人間の尊厳のために——

一 はじめに——自律性の大切さ——

カトリック社会論とは、カトリック教会が現代の緊急問題として発表した社会教説に解釈を加え応用を施した分野のことをさす。具体的には、一八九一年に教皇レオ一三世が発表した『レールム・ノヴァールム』（『労働者の境遇について』）をはじめとして、これまでに数々の社会教説が公表されてきた。⁽¹⁾ それらの社会教説を解釈し応用していくことがカトリック社会論の大きな役割である。最近、桜井健吾が「ケテラー司教の労働者問題」に精力的に取り組んでいることが注目されている。⁽²⁾ カトリック社会論が対象としたのも、社会的存在としての人間や人間社会を構成している一切のものであったが、特に産業社会とともに発生した労働者問題がそのはじまりであった。

そのような労働者問題や婚姻・家族問題と平行して、カトリック社会論では、尊厳をもつ人間が住むにふさわしい経済社会システムのあり方が議論される。人間にとってどのような経済社会体制が望

ましいのかという問題である。後でみるように、カトリック社会論では、純粋な資本主義（個人主義）や共産主義（集合主義）といった一元体制は強く否定され、そのような単純な一元論を超越した次元が追求される。ペルソナを持つ人間にとって、自己と自分の所属する社会との調和が大切なのは言うまでもなく、「連帯」や「共同善」が重視されるのは当然のことである。しかし、旧ソ連の崩壊以後、世界的に見てみるとEU（ヨーロッパ連合）の設立などもあり、個人の自律や地方分権を強調し、「補完性の原理」を重視するカトリック社会論が、もつと注目されるべきであるように思われる。

本稿は、カトリック社会論の中にあつてユニークな「補完性の原理」を、自由市場経済に関する議論の高まりと絡めて取り扱った筆者自身の覚書である。以下では、まずカトリック社会論の概要を、この分野では第一人者であるネルブロイニングに従つてまとめておく。次いで、経済体制論の分野で有名な野尻武敏の自由市場経済を紹介した後、筆者がカトリック社会論の中で大切であると考えている「ペルソナの理念」に簡単に言及する。続いてエピソードとして、聖書（「マタイ福音書」）の中にある「タラントンのたとえ」話を用い、聖書の中にも自由市場経済的な教えがあることを紹介する。そして、カトリック社会論の中で重要な個人の自律や、主体的な行動を具体化した企業家精神の重要性を指摘し、「補完性の原理」が人間の尊厳にふさわしいこと確認することでまとめとする。

二 カトリック社会論とは何か

ネルブロイニングは、イエズス会の司祭であつて、フランクフルト大学教授であると同時に、ドイツ政府各省の顧問も長く務めた人物である。社会・経済倫理研究の分野では第一人者として認められており、『カトリック教会の社会教説』（一九七七年、邦訳一九八七年）という重厚な書物の著者でもある⁽³⁾。彼によると、カトリック社会論の核心は、「人間は、社会の組織体と社会のできごとすべての起源であり、担い手であり、そして目的である⁽⁴⁾」、ということである。要するに、あらゆる社会活動に置いて、人間がその担い手となり、人間を目的とする社会活動こそが重視されるべきである、ということであろう。

さて、この書物は、かなり論争的かつ批判的な内容を持つているように思われる。「教会の社会教説はどういう真理を主張しているのか」という「はじめに」を一瞥すると、教会の教導職の限界を説いた根本的問題から始まつて、社会哲学なのかそれとも社会神学というべきなのかと問い、社会教説の専門科学の分野への侵害についても強く批判する。さらに、「教会が道徳的な裁きの場として、公共的な良心の機能を行使すべきであるならば、いま世の中に何が行われているのかとか、特に、この世で行われている不正が何であるかを知つて、この知識をもとにして教会の意見を述べるのが教会にふさわしい⁽⁵⁾」として、物事を測るのに道徳的ならびに規範的規準だけでは不十分であり、事実があるがままに認識すること、すなわち

経済学や社会学の認識が必要不可欠である、と続ける。

そして、カトリック教会の社会教説は、全く「未完の命題（テーズ）の体系」であつて、表現形式の基礎となつている暗黙のうちにある前提条件は代替可能であり、これらの前提条件が変わるのに応じて、命題に述べられ、命題を支えている、時と場所に関係なく通用する基準は、つねに繰り返し適用される。そして、それぞれの命題は、それまでに遂げられた認識の進歩をまとめたり、その結果を硬化させることを主張するのではなく、この進歩がただ学び続けることにあるだけでなく、一部は学びなおすことを要求するということを覚悟の上で、認識がさらに進歩するための基礎を築こうとする、という。

最後に、必要な注意として、「いつでも、どこでも活用されうるカトリック教会の社会教説の発言は「ごくわずかであろう」とし、「永遠の真理のみを述べよう」とすると、現実の世界や人間の困窮からはるかに離れてしまつて、私たちはこの世のパン種の役を果たす責任を全然まっとうできなくなるであろう」、と釘をさす。決して教会の権威を振りかざしたりせず、「カトリックの社会教説の代弁者は、その真理の主張がどの程度なのかをわきまえるべきであり、過大評価をしたり、行き過ぎたりしないよう細心の注意をはらうべきである」、というのがネルブロイニングの忠告である。

ここでは、以上のようなネルブロイニングの忠告を聞きつつ、カトリックの社会教説とは具体的に何をさしているのか、その内容を見ていきたい。「カトリックの社会論の三本柱は、共同善の理念、

補完性原理、連帯原理である」、といわれる。ここでも、高名なネルブロイニングの論文「カトリックの社会論」（一九八七年、邦訳一九九八年）に準拠しつつ、論じていくことにする。

(1) ペルソナとしての人間観

カトリック社会論は、人間をペルソナと捕らえ、人間の尊厳の根拠が人間の「ペルソナ性」にあると見ること特徴づけられる。この概念にとつて本質的なことは、個人が自律すべきであること、そしてその個人が社会の一員として社会に組み込まれていることを調和させようとする事、にある。要するに、人間が持っている自律性と社会性を調和させようとするのが、ペルソナとしての人間観である。それゆえ、「二面的命題、換言すれば個人と社会を均衡させ、調和させようとするペルソナ概念は、確固たる独自の土台を備え、完全に首尾一貫した理論であり」、個人主義や集合主義に欠如する超越的次元を有することになる。

(2) 連帯の理念

ペルソナとしての人間観から連帯の理念が導かれる。存在的側面から言つても、価値的側面から言つても、個と全体の相互関連は明白である。すなわち、「個人は、構成員として全体に係わり、全体はその構成員としての個人に係わる。この相互関連の現実が存在的側面としての連帯であり」、倫理的で法的な規範と義務のなか、構成員としての個人は全体に対して責任を持ち、全体はその構成員

各自に対して責任を持つ。この相互責任が価値的側面としての連帯である¹³⁾。注意すべきは、個々の構成員は個々の構成員のために存在するのであって、全体のために個々の構成員が存在するのではない、ということである。大規模な社会組織などでは、しばしば自分達が主人であるとの錯覚に陥りがちであるが、これは間違いである。またこの原理から、労働者が企業経営に参画し、経営者たちと共に責任を負うという「共同経営」が導かれる。

(3) 補完性の原理

上位から下位まで社会の序列がある中で、上位のものは下位のものから機能を奪って介入すべきではなく、可能な限り下位にいる当事者や関係者の自由に任せ、本当に下位のものが困った時に援助をすべきである、というのが補完性の原理である。これは、ペルソナである人間の自律性を重視し、自助 (self-aid) や個人の自立を助ける援助が最も大切なことを示したものである。ネルブロイニングは、近年のような行き過ぎた福祉国家は、個人を何ら主体性を持たない単なる援助される客体としてしまい、人間を墮落させてしまうことになるとして厳しく警鐘を鳴らす。彼は、自助や個人の自律の大切さという観点から、「補完性の原理は人間の尊厳にもつともふさわしい¹⁴⁾」、と喝破するのである。

(4) 共同善の理念

個人は、自己責任の下に、自己の任務を遂行していく。この目的

のために、社会的な協力関係の中で、個人に与えられる援助が共同善である。具体的には、国家の任務である社会の平和と秩序の確立や、公共的な制度と施設の整備などがあげられる。「全体を構成する者としての資格、構成員として全体のなかで占める地位、その資格と地位に応じて、個人は組織の目的と利益のために協力しなければならぬ¹⁵⁾」。また、不利な立場にある労働者に対して国家は責任を負い、効果的な社会政策の実施が望まれるのもこの理念による。行き過ぎてはいけませんが、国家の福祉政策もこの中に含まれてよい。

(5) 労働のもつ価値

人間が、物的福祉を確保するために懸命に働き、自己責任と他人との協力のもとで、労働を通じて自己を成長させ完成させることは、最も望まれることである。それ故に、「教会の社会論は終始一貫して社会的弱者の権利を守るために戦ってきたし、国家、社会、経済において権力を持った人々の不当な権利侵害を弾劾してきた。……最初の社会回勅『労働者の境遇について』(一八九一年)は労働者のための回勅であったし、今でもそうである。そこには労働の主人が労働者を奴隷なみに束縛しているという非難の言葉がある。最近の社会回勅『働くことについて』(一九八一年)も再び労働を取り上げ、手段でしかない資本よりも労働が優位に立つ、と強調した¹⁶⁾」のである。これらの言葉は、現代のような人間の雇用を軽視する日本社会に、特に当てはまるように思われる。

三 自由市場経済論

近年、自由市場経済の評判がすこぶる悪い。市場メカニズムを利用した経済社会は、人々が持っているインセンティブを引き出し、個人はもちろんのこと、社会全体の豊かさを増進させる。しかし、優勝劣敗の自由競争は、当然のことながら、人々の所得や資産の格差を拡大する。世間では、世の中に見られる貧富の差は、許容される範囲を越えているとの認識が広まっている。さらに最近の日本では、自由競争を行う際に、人々が守るべきルールの違反や、持っているべきモラルの低下が進んでいる。そのために、自由を優先し規制を嫌う自由市場経済のことを、苦々しく思っている人も増えている¹⁷⁾。

ところが、旧ソ連の崩壊により、所得や資産の平等を推進した共產主義経済が破綻したことは、周知の通りである。理念はいかに崇高であっても、統制や管理を中心とした計画経済社会では、人間の抑圧が進行するばかりで尊厳が維持できるとは考えられない。総てを保障する国家は、総てを統制する。人々に主体的な行動や自律を促す自由市場経済の方が、人間や事物の本性からいっても、わたし達にふさわしいシステムであることは疑うべくもない。経済社会の根本課題は、わたし達の欲求に最も適した形で、資源や労働を合理的に利用・配分することにあるからである¹⁸⁾。

自分のことは自分でしっかりとやるべきである。人間の人間たる所以は、そのような主体性や自律性の中にあるからである。また、自

分のことを自分で管理できない人が、他人のためにしっかりとやれるとは決して思われない。人間というものは、自然の脅威や社会の厳しさから多くのことを学ぶ。もし、そのような自然や社会の厳しさが無いならば、人間はいつまでたっても成長することのない、淋しい存在となることは間違いない¹⁹⁾。

以下では、経済体制論の分野で高名な野尻武敏の『第三の道——経済社会体制の方位——』を参考にしつつ、自由市場経済の特質を確認しておく。野尻によると、自由市場経済とは、自由資本主義の諸体系のうちに典型的に支配した経済社会体制であり、基本的には、①生産手段の私有、②経済活動における分権、つまり経済の計算・計画・決定・管理等の諸機能の個別経済への分散、③市場あるいは価格機構による経済過程全般の自動調整、といった諸要因から構成される。このような諸要因からなる自由市場経済が、多くの国で取られてきたことについては、以下のような様々な優れた機能が期待されるからである。野尻の言うところに従って、それらの諸機能をまとめておくことにする²⁰⁾。

(1) 期待される経済的機能

自由市場経済では、自由な市場価格が財やサービスの稀少性を的確に表示する。そして、個別経済はその価格を基に計算し競争的に行動するため、需要・供給は均衡に導かれるようになる。こうして、労働や資源の効率的な配分がもたらされると同時に、諸条件が変化した時の経済の柔軟な対応も可能となる。また、それぞれに

決定権をもつ分権的な自由競争は、競争参加者のモチベーションを高め、創造的な企業家の様々な活動を通じて、動態的かつ発展的な経済体制が実現される。さらに、フレキシブルな価格体系を通じて、生産諸要素の配置は時間的にも最適化に向かい、このような動的発展の体系は均衡成長の体系ともなる。

また、自由市場経済では分配も市場を通して公正に行われる。市場では等価原則によつて交換がなされ、稀少性に依りて価格が形成されるので、社会的に稀少な、従つて社会的に価値の高い財やサービスには、それに依りて高い価格が支払われる。これは、価値に応じた公正な分配がなされることを意味する。また、価格は人々が貨幣を用いてその財やサービスに与える評価であり、そうした価格に基づいた市場での成功は、社会的に評価される財やサービスをそれだけ有効に提供したこと、つまりその人の社会的貢献による。これは、貢献に応じた分配が行われることを意味する。さらに、競争的な市場経済では、より大きな利得機会へと労働や資本の移動が生じることから、所得が平均化される傾向がある。このことは、所得の社会的な平衡化も期待できることを意味する。

このように、効率的な経済、均衡的な経済成長、そして公正な所得分配が生じるとすれば、人々の生活水準の向上を始めとした経済的厚生の上昇もそれだけ有効に期待できることとなる。

(2) 期待される経済社会的機能

自由市場経済は、市場価格を通して、消費が生産を導くことから、

消費者主権もしくは消費者支配の体系となる。さらに、わたし達はすべからず消費者であるので、この消費者支配の体系は、すべての国民が経済を導く経済民主主義の体系ともなる。また、自由市場経済においては、私有財産制のもとに所有権は分散し、分権体制のもとに計画や決定の諸機能は各個別経済に委ねられ、通常、自由競争のもとに非合理的な勢力集中は阻止されるようになる。経済・社会勢力の分散が期待できるのである。このようにして、社会的自由の条件が整えられる。

(3) 期待される社会倫理的機能

自由市場経済は、各人の自由な活動と、その結果の責任を前提としている。だから、この体制を維持することは、人々に自律的な態度を促すことになる。そして、自律性は人格たる人間の特質であるので、自由市場経済は人格たる人間の在り方にも適合する。また、人格の尊重とともに、自由と自己責任の態度は、近代民主主義の精神基盤でもあるから、自由市場経済は民主主義の精神にも合致し、その精神基盤の形成を助けるものとなる。

さらに、自由市場経済においては、自由だけでなく、平等と正義の実現も期待される。この体制が有する法制度上の前提は、万人への私有権ならびに自由権の平等の保証、社会的かつ経済的活動の機会の平等を保証するものでなければならない。これらは、平等の理念に立つ社会的正義の一つの制度化を意味する。また、この体制においては、先に述べたように、等価原則による交換的正義や貢献原

則にもとづく分配的正義も、その実現が期待されるのである。

四 ペルソナの理念

さて、自由市場経済は、各人の自由と自己責任を前提とし、この体制の維持は人々にそうした自律的な態度を促す。そして、自律性は人格たる人間の特質であるから、自由市場経済は人格たる人間の在り方に適合する、と述べた。また、カトリック社会論は人間をペルソナと捕らえ、人間の尊厳の根拠が人間の「ペルソナ性」にあると見ること特徴づけられる、とも指摘した。

ここでは、自律性は人格たる人間の特質であるといわれ、人間の尊厳の根拠が人間のペルソナ性にあるといわれる、ペルソナの理念をもう一度確認しておこう。

『新カトリック大事典』（浜口吉隆稿）によると、一般にペルソナ（人格）とは、理性と自由意志を備えた自律的存在である人間についていわれるものである。それは、精神的価値をもち、権利や義務の主体として社会的な役割を果たし、責任ある行動をとりうる。また、良心の具体的で自由な決断に基づいて、自己と他者に責任ある対応をなすよう呼ばれている。聖書からは、「人は単に被造物の一つとしてではなく、神の似姿として造られ、自由な存在として神の呼びかけを聞きうる」とされる。²¹

以下には、わたし達の認識にとって必要であると思われる、ペルソナ（人格）と人間、ペルソナ（人格）と共同体、ペルソナ（人格）

と尊厳・自由・責任、ペルソナ（人格）と人権について、確認しておきたい。

(1) ペルソナ（人格）と人間

わたし達人間は、身体性と精神性を備えており、時間と空間の中に生きている。人格は、そのことを活かしつつ、歴史の中で人格形成を図っていくことになる。わたし達は、人間の歴史と世界の中に生きており、全ての被造物と神との交わりを通じて、自由かつ責任ある行動によって、各自に固有の方法で、自己を実現していくのである。

(2) ペルソナ（人格）と共同体

わたし達人間は、自分一人で自足することは出来ず（自足性の欠如）、多くの人との協力体制が必要である。人間は、本性からして社会的存在であり、深く暖かい人格的な交わり、連帯性と相互依存によるお互いの奉仕や交換を通じて、全ての人々の幸せに貢献することが出来る。また、他者やその世界への開放性は、神の似姿としての人格が、神に開かれていることを前提としている。

(3) ペルソナ（人格）と尊厳・信仰・責任

人格は行為の主体であり、自由に善を志向していく。また、人間の尊厳は、人間が知識と自由な選択によって行動することを要求する。このような選択は、人格としての内面的な動機に基づくもので

ある。信仰は、自己を啓示する神への人格的な応答であり、また、信仰の自由という権利は、人間の尊厳に基づき、理性と自由意志を備えた自律的存在である人間の、責任ある行為を要求する。

(4) ペルソナ（人格）と人権

わたし達人間は、人格として尊重されるべきである。人間の権利と義務は普遍的なものであり、決して侵すことはできない。自由権、財産権、生存権、労働権、教育を受ける権利、参政権などの基本的人権は尊重されるべきである。ドイツ基本法の第一条第一項には、「人間の尊厳は不可侵である。これを尊重しかつ保護することはすべての国家権力の義務である」とある。

五 聖書の中の「タラントンのたとえ」話

ここでは、エピソードとして、聖書（「マタイ福音書」）の中にあるたとえ話を紹介する。バツハが作曲した「マタイ受難曲」のテキストである「受難物語」（26-27章）に入る直前のところに、わたしたちが自由市場経済でたくましく生きていくべきことを示唆するたとえ話が出てくる。それが「タラントンのたとえ」（25章14-30節）である。

天の国は、また次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かける
とき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。それぞれの力に応じて、

一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて旅に出かけた。早速、五タラントン預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントンをもうけた。同じように、二タラントン預かった者も、ほかに二タラントンをもうけた。しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた（25章14-18節）。

人間の平等は、先にも示したように、人間が「神の似姿」として有している人格としての平等にあるのであって、個体として人間が持っている顔かたち、体力、知力、才能、感性などの平等ではない。いや、人間の素晴らしさは、神が創った大自然を見れば明らかのように、それらの驚くべき多様性（差異）の中にある。わたし達の社会では、個人の間タレントなどの多様性（差異）があつた方がよいのである。そのような才能や能力の多様性（差異）を利用した分業（division of labour）こそが、自由市場経済の中心である生産の増大や社会全体の富の拡大をもたらしたからである。

神は、すべての人間に、なんらかの役割を与えた。それが「タラントンのたとえ」である。それ故に、どんなに様々な点で劣つていようと、わたし達の社会で必要のない人は一人もいない、ということになる。五タラントンを預かった能力に恵まれている人は、それだけで重い十字架を背負って仕事をしなければならぬから大変だつたであろうが、ちゃんと企業家精神を發揮して自分の仕事を果たした。主人との契約をしつかりと守り預かつたお金を二倍にしていくためには、幾多の危険を乗り越える勇氣と行動力が無ければなら

らない。五タラントンを預かった人は勇氣を持つて仕事をし、資金を倍にするという結果を出したのだから、実に素晴らしいことである。

また、普通の才能の人はもちろんのこと、能力に何ら恵まれていない人であっても、主人にいわれた最低の仕事はやつておかねばならない。ここでは、一タラントンしか預からなかった者は、「出て行つて穴を掘り、主人の金を隠しておいた」ので、言われたことを何もしなかつたということから、その無責任な態度を糾弾されても仕方がない。「タラントンのたとえ」の少し前のところにも、「忠実な僕と悪い僕」として、主人から言われた仕事をしっかりとやる者とやらない者に関して、次のような話が記されている。

主人がその家の使用人たちの上に立てて、時間どおり彼らに食事を与えさせることにした忠実で賢い僕は、いつたいだれであろうか。主人が帰つて来たとき、言われたとおりにしているのを見られる僕は幸いである。はつきり言つておくが、主人は彼に全財産を管理させるにちがいない。しかし、それが悪い僕で、主人は遅いと思ひ、仲間を殴り始め、酒飲みどもと一緒に食べたり飲んだりしているとす。もしそうなら、その僕の主人は予想しない日、思ひがけない時に帰つて来て、彼を厳しく罰し、偽善者と同じ目に遭わせる。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう（24章45―51節）。

自由市場経済では、真面目に働くこと（勤勉）、言われたことをしっかりとやること（忠実）、製品の納期を守ること（契約の遵守）、人々が望んでいる新しい商品やサービスを提供すること（発明や発

見）など、様々なことが期待されている。お互いの信頼がなければ自由市場経済は成り立たない。わたし達は一人では生きていけないからこそ、自由市場経済を通じた商品やサービスが必要なのである。個人の自己責任と人々との相互依存が自由市場経済の要である。真面目に働かない人、言われたことをしっかりとやらない人、製品の納期を守らない人、人々が望んでいる商品やサービスを提供しない人は、自由市場経済から退出 (exit) しなければならぬ。勤勉、努力、儉約、忠実、継続、先見、忍耐、正直、自制、節度、意志などの徳目が、自由市場経済では特に必要とされる。

ところで、「タラントンのたとえ」の続きはどうなっているのか。

さて、かなり日がたつてから、僕たちの主人が帰つて来て、彼らと清算を始めた。まず、五タラントン預かった者が進み出て、ほかの五タラントンを差し出して言つた。「御主人様、五タラントンお預けになりましたが、ご覧ください。ほかに五タラントンもうけました。」主人は言つた。「忠実な良い僕だ。よくやつた。お前は少しのものにも忠実であつたから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。」次に、二タラントン預かつた者も進み出て言つた。「御主人様、二タラントンお預けになりましたが、ご覧ください。ほかに二タラントンもうけました。」主人は言つた。「忠実な良い僕だ。よくやつた。お前は少しのものにも忠実であつたから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。」（25章19―23節）。

どのような人であっても、ある一定の目標を立て、その目標に向けて一心不乱に邁進し、その目標を達成してしまうことほど素晴ら

しいことはない。自由市場経済においてもまさにそうであつて、個人は自分の予算や能力の範囲内で自分達の満足が最大になるように、企業は自分達の予算制約の下にコストを最小に抑え、利潤が最大になるように効率的に行動している。自由市場経済は、一時的に行き過ぎることはあつても、通常は市場メカニズムがそれらをうまく調整する。自分の利益と他人の利益の両者を満足させなければ、自由市場経済は持続可能であるとは言えない。上の話でもそうであるが、タレントの差異に応じて各人はしつかり仕事をし、着実に利益をあげることが要請される。そうすることが、資本を持ちそれを他人に託した人の喜びとなり、それを預かつて利益をあげる人のミッションや喜びともなるのである。

さて、一タラントン預かり、それを穴を掘つて隠しておいた人は、どうなつたのであろうか。

ところで、一タラントン預かつた者も進み出て言つた。「御主人様、あなたは時かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる、敵しい方だと知つていましたので、恐ろしくなり、出かけて行つて、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。ご覧ください。これがあなたのお金です。」主人は答えた。「怠け者の悪い僕だ。わたしが、蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知つていたのか。それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであつた。そうしておけば、帰つて来たとき、利息付きで返してもらえたのに。さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持つている者に与えよ。だれでも持つている人は更に与えられて豊かになるが、持つていない人は持つていないものまでも取り上げられ

る。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう」(25章24-30節)。

神の国に入るには、怠惰はきつく戒められよう。また、何かを恐れて何もしないというのも、神の意志ではない。さらに、自由市場経済の中では、懸命に働いて利益をあげ、社会に貢献することが期待されている。そうしなければ、小さな人たち(子ども、病気の人、苦しんでいる人、年老いた人など)に優しくすることなど出来ないではないか。その際に、努力する人にはたくさんの富が与えられ、努力しない人には何も与えられない。わたし達には、敵しい自然や社会でおこる様々な困難や試練に打ち勝つ、強い精神力が必要なのである。神が与えた敵しい自然や社会があるからこそ、人はなんと自分の境遇を改善するために努力していく。一タラントン預かつた者のように、失敗を恐れて何もしない小心な者や怠惰な者に、神の国に入る資格はない。

「タラントンのたとえ」の結びに書いてある「だれでも持つている人は更に与えられて豊かになるが、持つていない人は持つていないものまでも取り上げられる。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう」という言葉は、少し無慈悲なことのように聞こえる。しかし、神はもととわたし達に楽な人生を送つていくことなど期待していない。積極的な人生を送るために、多くの不安に打ち勝つ強い意志と、たゆまぬ自己改革を伴つた精一杯の努力を期待しているのである。

六 おわりに——人間の尊厳のために——

これまで、カトリック社会論と自由市場経済を検討してきた。カトリック社会論で重要なベルソナの理念は、人間の自律（自由と自己責任）と、社会の中での相互依存性であり、自由市場経済においてもそれは重要であった。要するに、自律性と社会性の調和こそがカトリック社会論の核心であるが、自由市場経済においてもそうだったのである。しかし、自由市場経済には欠点も多い。筆者が少し考えただけでも、人間を中心に考えない、景気の波がある、失業者がたえない、勝者と敗者が生まれる、一人勝ちになりやすい、貧富の差が拡大する、公共財やサービスが提供できない、モラルに欠けやすい、ビジネスライクで冷たい、などが挙げられよう。²³野尻も自由市場経済の限界を述べ、国家の充当補完政策などが必要なことや、非人間的で利益中心の市場の論理と性格が支配する経済社会を強く危惧している。²⁴

わたし達は、ネルブロイニングが指摘したように、カトリック社会論の核心である、人間こそが社会の組織体と社会の出来事すべての起源であり、かつ担い手であり、目的であることを十分に考慮に入れつつ、あらゆる経済社会活動に置いて、「補完性の原理」を基礎にすえた、尊厳をもつ人間にふさわしい経済社会システムの構築を心すべきであろう。自分に出来ないことは家族や地域・国の援助を受けても良いが、自分に出来ることは極力自分でやるべきであるというのが補完性の原理であり、これは尊厳を持つ人間に最もふさわ

わしいように思われる。

「タラントンのたとえ」話は、自分に与えられた仕事を契約に従って、忠実にやり遂げることにあつた。人間には、自律性に基ついた企業家精神を十分に発揮して、厳しい自然や社会に果敢に挑戦し、それらに打ち勝つために努力することが望まれている。そして、勤勉と忠実、人々との相互依存性、企業家精神、労働を通じた自己実現などにより、着実な社会の進歩と人間の精神的な成長とが期待されているのである。ひよつとしたら、このようなチャレンジの過程の中で、人間も神に近い人格を持つことが出来るようになるかもしれない。わたし達人間は、神が与えてくれた様々な困難や試練に決して絶望するのではなく、「艱難汝を玉にす」と肯定的に考え、希望を持つて前進していくことが必要である。

また、わたし達人間は、過度に経済（お金）に執着することは避るべきである。しかし、企業家精神を発揮して獲得した富を忌み嫌うことは、聖書の教えから見ても正しいことは言えないように思われる。わたし達の日常生活は、経済（お金）を抜きにしては考えられないのであるから、世の中で起こる経済（お金）に絡んだ多くの問題に対しても、細心の注意を払いつつ賢明に対処していくことが望まれよう。²⁵

註

(1) 主なものとして、レオ三世の『レールム・ノヴァールム』（『労働者の境遇について』、一八九一年）以外に、ピオ二世の『クアドラジェ

- ジモ・アンノ』(『社会秩序の再建について』、一九三二年)、ヨハネ二三世の『マーテル・エト・マジストラ』(『キリスト教の教えに照らしてみた社会問題の最近の発展について』、一九六一年)、同『パーチェム・イン・テリス』(『地上の平和について』、一九六三年)、パウロ六世の『ポプロールム・プログレシオ』(『諸民族の進歩推進について』、一九六七年)、同『オクトジェジマ・アドベニエンス』(『レーヌム・ノヴァールム公布80周年を迎えて』、一九七一年)、ヨハネ・パウロ二世の『ラポーレム・エクセルチェンス』(『働くことについて』、一九八一年)、同『チェンテジムス・アンヌス』(『新しい課題』、一九九一年などがある)。
- (2) W・E・ケテラー著桜井健吾訳・解説、『労働者問題とキリスト教』(晃洋書房、二〇〇四年)を参照されたい。今年も、第二弾としてW・E・ケテラー著桜井健吾訳・解説、『自由主義、社会主義、キリスト教』(晃洋書房、二〇〇六年)が上梓されている。そこでの彼の詳細な解説や付論を読むと、補完性の原理がカトリック社会論の中で、いかに重要なものが良くわかる。この用語を最初に用いたのは、ケテラーであったようである。
- (3) オズヴァルド・フォン・ネルブプロイニング著山田経三監修『カトリック教会の社会教説——教導職諸文書の解説——』(女子パウロ会、一九八七年)を参照のこと。
- (4) 同上、二〇頁。
- (5) 同上、一七頁。
- (6) 「未完の命題(テーゼ)の体系」とは、ヴァルラフが提起したもので、「アリストテレス・スコラ哲学の言うところでは、説明的な解釈と規範的な解釈は切り離せないひとつのまとまりである。形而上学的存在状態から価値性と義務へといたる結論は正当であるだけでなく、必要なものでもある。規範的な文章は、その抽象的な普遍性において説明的文章の真理の主張にあずかっているのである。しかし、それではまだ具体的な行為と、そのための基準となる具体的な規範について述べられていない。これについては、さしあたりまだ、すべてが未完である。全く同じことが、詳細かつ具体的な説明的言明についてもあてはまる。まさにこ
- れがカトリック教会の社会教説が、未完の命題の体系として分析される理由にほかならない」、という。同上、一七頁、を参照されたい。
- (7) 同上、二九一三〇頁、を参照のこと。
- (8) 同上、三〇一三一頁。
- (9) 同上、三三頁。
- (10) W・E・ケテラー著桜井健吾訳・解説、『労働者問題とキリスト教』の訳者はしがきを参照のこと。
- (11) オズヴァルド・フォン・ネルブプロイニング稿桜井健吾訳、『カトリック社会論』『社会と倫理』、第五号(一九八七年三月)、一三三—一三九頁、を参照のこと。
- (12) 同上、一二九頁。この超越性ということについて、ネルブプロイニングは、「人間の尊厳の究極の根拠は神との関係に求められる。ここにカトリック社会論の人間論の特徴がある。人間の尊厳の根拠は、人間の理性的考察と人間の自己決定の責任にあると考える点で、カトリック社会論は純粹な人間論の自己決定の責任にあると考える。ここにカトリック社会論は、それをはつきり神に対する責任だと考える。この人間論、この人間の尊厳論という点で、カトリック社会論は純粹な人間中心主義の社会論よりも優位に立つ。この限りで、次元の異なる、より高い価値世界のなかにある。しかし、カトリック社会論が、個人主義と集合主義の極端な一面性を回避しようとすることに変わりはない。この限りで、カトリック社会論の主張は二思想の中間にある」、と述べている。同上、一二九—一三〇頁、を参照のこと。
- (13) 同上、一三〇頁。
- (14) 同上、一三二頁。シュンペーターも、補完性の原理に注目していることは知っておく必要があるであろう。シュンペーター稿八木紀一郎編訳、『資本主義は生き延びるか』(名古屋大学出版会、二〇〇一年)、三三—三四—三二五頁、を参照のこと。
- (15) 同上。
- (16) 同上、一三七頁。ヨハネ・パウロ二世の『ラポーレム・エクセルチェ

- ンス』（『働くことについて』、一九八一年）に関しては、中矢俊博、「働くことに普遍的価値を見出す信仰と思想」、『福音と社会』、一九三号（二〇〇一年二月）、二八―三四頁、をも同時に参照されたい。
- (17) 筆者は以前、アメリカのジョージタウン大学にあるケネディ倫理研究所のジョン・ランガン博士の論稿、「倫理・ビジネス・経済」を翻訳したことがある。自由市場経済のメッカであるアメリカにあって、道徳・文化システムの再構築を願うだけでなく、企業の管理職にある人たちの責任感を再生しようと努力し、そのために道徳的戦いの必要性を叫ぶランガンの主張には、強く共感したものである。ジョン・ランガン稿中矢俊博訳、「倫理・ビジネス・経済」、『社会と倫理』、第一四号（二〇〇三年一月）、一一―二八頁、を参照のこと。また、最近見られる日本企業のモラルの喪失やビジネス・エシックスに関する様々な問題点を鋭く指摘している、橋本の優れた論稿も同時に参考されたい。橋本昭一、「I ビジネス・エシックスの諸相」、『ビジネス・エシックスの諸相と課題』、関西大学経済・政治研究所『研究双書』、第一四三冊（二〇〇六年三月）、一―四〇頁。
- (18) ヨハネ・パウロ二世も、『チェンテジマス・アンヌス』（『新しい課題』、一九九一年）の中で、倫理的・宗教的自由を経済的自由と切り離しつつ、「資本主義という言葉が、ビジネス、市場、私有財産、そして生産のために引き起こされる責任の、基本的に肯定的な役割を、経済的分野における自由な人間行動と同様に認める経済システムを意味するのなら、その呼び名がより適切には企業経済、市場経済と称されるべきであつても、その答えは確かに肯定的であろう」として、資本主義に一定の評価を行っていることは、注目されてよい。ヨハネ・パウロ二世、『チェンテジマス・アンヌス』、『福音と社会』、第一四七号（一九九一年八月）、五四頁、を参照のこと。
- (19) マルサス『人口論』初版の最終二章には、自然の脅威や社会の厳しさが、社会を進歩させると同時に、人間精神の覚醒や成長にも必要不可欠なことが論じられている。筆者も以前、「マルサスの自然神学思想」と題して、それらをまとめたことがある。中矢俊博、「ケンブリッジ経済学研
- 究——マルサス・ケインズ・スラッファ——」（同文館出版、一九九七年）に所収の当該論文を参照されたい。
- (20) 野尻武敏、『第三の道——経済社会体制の方位——』（晃洋書房一九九七年）、五七―七四頁。ここでの叙述は、そのほとんどを、野尻の当該箇所を負うものである。また、自由主義者であるハイエックの思想・論稿を紹介した次の書物も、同時に参照すると良い。F・A・ハイエック稿田中真晴・田中秀夫編訳、『市場・知識・自由——自由主義の経済思想——』（ミネルヴァ書房、一九八六年）。
- (21) 学校法人上智学院新カトリック大典編纂委員会編、『新カトリック大典』、第三卷（研究社、二〇〇二年）、三六四―三六六頁、を参照のこと。筆者には、ここで浜口が行ったベルソナ分析は、実に優れたものであるように思われる。しかし、本稿で展開した筆者の議論には、神学で論じられるキリスト論や三位一体論からくるベルソナ概念は含まれていないことをお断りしておく。
- (22) 共同訳聖書実行委員会訳『聖書』（日本聖書教会、一九九五年）、四七―一五〇頁。
- (23) 自由市場経済の欠点について、筆者は「市場経済の影の部分」と題して、市場の暴力、市場の失敗、市場の不安定性、市場の侵入などをまとめたことがある。中矢俊博、「経済の仕組みと人間の尊厳」「人間の尊厳のために」（南山大学、二〇〇六年）、一〇五―一二七頁、を参照のこと。
- (24) 野尻は、市場機構が完全に作動し、充当補完政策や分配政策が完璧に行われたとしても、解決のつかない様々な問題があることを鋭く指摘する。そして、「市場経済体制を土台とする社会は、別の人間的・精神的な統合の原理とエートスが助成されないかぎり、非人間的にして利益社会的な市場の論理と性格が支配する社会となるほかはない。……こうした社会は人間の疎外された人間不在の社会である」、と喝破する。野尻、七―一七三頁。わたし達に残されているのは、人間を中心とした経済社会システムをいかにして構築するかという問題である。
- (25) 聖書に慣れ親しんだ読者の中には、自由市場経済やこの世の富を肯定する筆者の分析に、反発する人がいるかもしれない。聖書には、「だれ

も、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」(6章24節)、ともあるからである。しかし、その場合の富とは、行き過ぎた偶像崇拜としての富であって、わたし達の日常生活に必要な富ではないことを忘れてはならない。